

経済セミナー書評 (2012年6・7月号)

大内伸哉・川口大司／著 『法と経済で読みとく雇用の世界』 有斐閣

(評者) 日本大学准教授・安藤至大

■ 労働法学者と労働経済学者は、同じく労働問題を研究しているのに、以前はあまり交流がなかった。なぜか。それは、考え方の違いが大きすぎたからだ。乱暴な言い方をすれば、おそらく法学者は、経済学者が「労働者の悲惨な実態や労働法の果たす役割などを理解せずに、机上の空論ばかり並べている」と思っていただろうし、反対に経済学者も法学者のことを「裁判になったような極端な事例ばかり見ている、安易な規制がもたらす副作用への配慮が足りない」と否定的に考えていたのではないか。

しかし近年、共同作業が活発になっている。例えば2008年に出版された『雇用社会の法と経済』（荒木尚志・大内伸哉・大竹文雄・神林龍 [編]、有斐閣）では、法学者と経済学者が各章ごとにペアになっていて、労働に関する様々なテーマを慎重に検討している。ただし、そのほとんどは、「法学ではこう考える」と「経済学ならこう考える」が併記された形であり、共同作業というよりは紙上対談に近いものだった。

■ これに対して、労働法学者の大内氏と労働経済学者の川口氏の手による本書は、ひと味違う。法と経済がうまく混ざり合った一つの作品なのだ。もちろん良く読めば、二人のどちらが書いた部分かは予想できるものの、全体を通してスムーズに読み進めることができる本に仕上がっている。

序章では、まず法学と経済学の考え方の違いが簡潔に紹介される。それに続く13の章では、採用内定取消と解雇規制、非正規雇用、採用とマッチング、男女間の賃金・待遇格差、高齢者雇用といった重要なテーマが、法学と経済学の両面から考察される。そして終章では、労働経済学の基礎が紹介されている。この章は、おそらく法学がバックグラウンドの人向けなのだろう。

なお各章の冒頭では、複雑な人間関係を描く一続きのストーリーが展開される。人によっては、その濃すぎる展開に違和感を覚えるかもしれない。なにしろ登場人物の生き方がかなり奔放なのだ。このようなタイトルの本の中に、まさか「そして、ある夏の暑い夜、郁美は仕事帰りに一緒になった淳也を食事に

誘い、ついは一線を越えてしまったのである」などという文章が出てくるとは思わないだろう。しかしその内容は、実は各章のテーマと上手くリンクしていて、注意深く読むととても勉強になるのだ。

■ 表現は平易だ。また適宜用語の解説があるため、労働法についてまったく知らない読者でも、容易に読み進められる。分かりにくい専門用語、例えば p.122 にある「反対解釈」などが見つかった場合は、その意味をネットで調べれば良い。

本書を読むと、思った以上に法学者と経済学者の間での相互理解が進んでいると感じるかもしれない。しかしそれはおそらく間違いだ。大内氏は労働法学者の中でも、特に経済学の考え方に親和性が高い研究者のうちの一人であり、法学者全員がこのような形で理解を示すわけではない。

■ 良書である。とても良い。ただし労働問題に関心を持った人が、最初の一冊として選ぶ本ではない。経済学部生なら、例えば太田聰一・橘木俊詔著『労働経済学入門（新版）』（有斐閣、2012年）などの入門書を先に読むことをお勧めする。その後のほうが本書の有り難みがよく分かるし、より有効活用できるだろう。

労働問題に関心がある人、また法と経済学に関心がある人には是非読んで欲しい一冊だ。